
君主は食べられないお菓子。

十字 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君主は食べられないお菓子。

【Nコード】

N2865J

【作者名】

十字 杏

【あらすじ】

領主の子、レヴィルは暗い森の中で不思議な少女、アネモネと出会う。

アネモネは耕作の民だった。

【馬や羊のように武力をもってせねば。言葉は通じまい。奴らは人にあらず畜生なのだから】——レヴィルの脳裏に聖書の一節がよぎる。

アネモネには恥ずかしくて誰にもいえない夢があった。許されるのなら……この広い森の先に見える景色を。

はじまり（前書き）

一人でも読んでくださる人がいるのなら、私は幸せです。

はじまり

———創造主の最上の作品というのに僕らはなぜかくもいびつ『・・・』なのだろう。

仮にもしかの御方が僕らを見下ろして美しいなどと陶醉してなどいれば、それはすな

わち彼自身が歪んでいるというほかない———

神懸かった輝きを青々と湛える満月の下、《暗い森》は文字通り澄み渡った夜空に比した
澱のごとく、暗く重く遍く広がる。

この森を両断して走る《繫領街道》。
馬車三つが並走出来るほどの道幅で緋色の砂利が敷き詰められている。

大遠征時代に軍の補給線として開発され、戦乱時の面影を纏いながらも現在は貿易の大動脈としての機能を果たしていた。

この樹海に引かれた仄暗い街道をなぞって奔る一つの車影があった。
装甲馬車と呼ばれる堅牢な造りの馬車だ。

鈍色の装甲板は槍や矢、破城槌にいたるまであらゆるたぐいの物理攻撃を無効化するすこ

ぶる特異な金属で形成されている。名をヒヒイロカネというが遙か渡来の代物なのでこと

の委細は定かではない。

それを悠々と双の黒馬が引く。

目の前で通り過ぎる黒糸杉の乱立するさまがあまりにも代わり映えの無いものだったの

でついにレヴィルは車窓から目をそらし狭苦しい馬車の中を一瞥した。

朽葉色のレザーマントを羽織っていたが邪魔で仕方がなかった。

しかし外に出れば羽織

るのをわざわざ取ってしまうのも同様に億劫だ。

暗い森を有する辺境の広大な領土―テルノ・ノグー、この土地を絶対的な武力をもって支

配し頂の上に君臨する《領王》。レヴィルは彼の妾腹。とりもな

おさず領王の後継者の

一人だった。

昨日までは。

権力者の息子という否応もなく重い立場はまだ声変わりも始まっていない少年の風貌を覇者のそれに仕立て上げた。

もはやレヴィルには子供らしいという形容はどこにもつけられそうにない、愛らしい寝顔のほかには。

「救いがたく不味いなあ」

嘲りと溜息混じりの甘ったるい声。

人の心情を見透かし平然と逆なでするかのような声の主はレヴィルの筋向かいに座っていた。

銀髪紅眼、確かに整った顔立ちだがどこか無機質めいていて人形と相對しているかのような違和感。

その人形の様な娘が頬杖をつきながらさも退屈げにティーカップに口をつけている。

魔力を纏った白銀の髪は首を傾げる仕草のたびに月光を乱反射して煌めいた。

この兇悪の魔女とは金輪際口をきくものかと、心に深く刻んだレヴィルだが

「ウェスタ……」

ほとんど無意識に彼女の通り名を呟いた。

慮外の行為に努めて仏頂面を崩さないレヴィルだが思わず露骨に口をつぐんだ。

これでは、とレヴィルは思った。

これでは愛しい人に囁きかけた恋人の様ではないか。

彼女―ウエスタリス―はレヴィルの方を見、ついと身を乗り出して笑った。

内心穏やかではないがレヴィルは横柄な態度で不快さを示した。

「くふふ、頬が真っ赤だ。小君主どの」

《ここまで》

はじまり（後書き）

ありがとうございました。

しまぎのお話(前書き)

おねがいます。

つまずきのお話

——恋せよ乙女、その恋の幻想が霧散せぬうちに——
——曰くハウゼン・セルパズイル

さて、始めました『君主には食べられないお菓子 第二話』。
私、作者の十字、と申します。

とりあえず、冬です。

冬まっしぐらというべきですか。

いや、冬とまっしぐらの間に空白をおいて「冬 まっしぐら」と妙にキャッチコピーみたいなかんじのほうがいいかしらん。でもこれがなんの商品、あるいは何の商業的アピールになるのかは甚だ不明です。むしろ五里霧中です。すみません意味わからずに使ってます。なんかゲームボーイにステッカーをぺたぺた貼りまくる小学生のごとき無分別で阿呆です。四字熟語って何かいいわぁ、と。これはばかですね。馬鹿の初期症状ですね。そういえば痴呆症の人は自身の病気の可能性をやたらことさらと否定するらしいですよ。とゆうことから類推してやっぱり私も、ほほえましき一バカヤローの端くれとして、烈火のごとく自分の馬鹿性を否定するとしましょう。わたし莫迦じゃないもん！

話戻って哀れその裸身にステッカーを張りまくられたゲームボーイの末路を話していききたいと思います。だって語りの風呂敷を無思慮に広げまくったから筆者は一体全体、何を言いたいやらとほうにくれているのですよ。あ、でもこれ理由になっていませんね。

まあいいや。

おそらくそのゲームボーイは腕白盛りの少年の手によって雨にふやけ引っ掻きに傷つき、一ヶ月とその元の姿を保たないでしょう。

この頃の少年は好奇心旺盛な一方、恐ろしく移り気の早いこと。するとどうなるかって日を見る、もとい月を見るより明らかです。そうですよ、読者諸賢。どうやらあなた方はとても思慮と機知に富んでいらっしゃる。

少年は大事なゲームボーイに張り付いたみすばらしく汚れくすんだステッカーを嫌悪し、迫害するのです。

その迫害ぶりたるや、かのナチスヒトラーのユダヤ民族一掃作戦もかくやと思わせる徹底した鬼畜ぶり。そもそも一切の根源的原因というのは彼にあるわけですが顧みることもなく、もはやこの忌々しきステッカーを張り替えんと躍起です。まあ、そこらへんに彼ら特有の可愛らしさがあるのですが。

おりしも、他でもなく彼が大好きな絶賛放送中アニメ「ピチャットモンスター」のコマーシャル中に何となくゲームボーイに目をやったときのことです。時間が時間でした。早くしないと『ピチャモン』始まっちゃうよ。少年は無邪気にこう言い放ったことでしよう。あとですればいいじゃないか。というこえがちらほらと耳に届きますが、問題は彼が子供は風の子猪の子という点にあります。

だが、読者諸賢。

時間に追われた時の腕白小僧の衝動的行為といったら血も涙もおやつもありません。無論お小遣いありません、あしからず。

たとえば、ペーパーテスト中、重い通りに事が運ばなければ腕白少年は時として、テストをくしゃくしゃに丸めて口の中に押し込むという荒技をやったのけるのです。

これは私の持論ですが、おそらく腕白だった頃の少年の頭にはエヴァ風暴回路が内蔵されているのです。そしてときおり頭の中の妖精が気まぐれに押してみたりするのです。だから、ときおり彼らは初号機みたく「うおおおん」とか奇声を発するんですね、鬼

ごっこの時のように。

さて、閑話休題。

少年は猫の俊敏さで引き出しの中をまさぐります。

そして手にするは、小学生に唯一所持することを許された一對の凶器。

はゝさゝみゝ。かれはすでに勝者の顔つきでこう叫んだに違いありません。

さて、はさみをつかみちようどゲームボーイの真上にかざし……。すつ、とためらいもなくゲームボーイを打ち据えたのです。

愚かにも彼はすでに愚行を行っていたのです。愚が二回連続使われるほどの愚かしさです。

《ちよつと休憩します》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2865j/>

君主は食べられないお菓子。

2010年10月12日03時05分発行